

学術奨励賞を受賞して



中田 佳世 専門委員

大阪国際がんセンター がん対策センター政策情報部

この度は、「がん登録資料を活用した小児・AYA世代のがんの疫学研究」に対し、学術奨励賞をいただき、誠にありがとうございます。関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

今回賞をいただきました研究の紹介をさせていただきます。

一つ目は、「がん登録データを用いた、小児がんの罹患率・生存率の日英比較」です。この研究は、2016年、ロンドン留学中に行ったもので、日英のpopulation-basedのがん登録データを用い、小児に発生する各がん種における罹患率・生存率を比較しました。日本からは、6府県（宮城、山形、福井、新潟、大阪、長崎）の地域がん登録のデータ、英国からはEnglandのがん登録データを使わせていただきました。小児がんの年齢調整罹患率をがんの種別に日英で比較すると、ホジキンリンパ腫、小児腎腫瘍、Ewing肉腫は英国の罹患率が日本の2倍以上あり、急性骨髄性白血病、神経芽腫、肝腫瘍の罹患率は日本の方が高いなど、多くのがん種で罹患率に違いがみられました。小児における全がんの5年実測生存率は、日英とも1990年代には70%前半であったのが、2000年代後半には、両国とも約80%に改善していました。がんの種別に生存率の推移をみると、特に慢性骨髄性白血病の生存率の改善が目覚ましく、2001年に導入された分子標的薬（imatinib）の影響が示唆されました。

二つ目は、米国・欧州の研究者とともに、AYA世代（思春期・若年成人、adolescent and young adult）のがんに関する書籍の、疫学に関する章を作成しました。AYA世代に発生する各がんの生存率を米国（SEER）、欧州（EUROCARE）のデータと比較したところ、日本における急性リンパ性白血病と横紋筋肉腫の5年相対生存率が、欧米に比べて低い傾向を示しました。

三つ目は、大阪府におけるAYA世代の白血病・リンパ腫患者を対象に、地域がん登録資料に基づき患者を抽出し、各診療病院が持つ患者の詳細情報をリンケージさせることにより、診療の実態・治療成績を調査して報告しました。AYA世代の急性リンパ性白血病患者の5年実測生存率は、AYA世代全体（15-29歳）で44%と低く、特に若年成人（20-29歳）では29%と低いことが明らかとなりました。また、死亡リスクハザード比は、小児型レジメンを用いていない群が用いた群に比べ高い傾向を示し、治療方針による予後の違いが示唆されました。

私ががん登録の仕事をはじめた5年前には、わが国の小児やAYA世代のがんについて、正確な罹患数すら明らかではありませんでした。小児・AYA世代のがん対策を進めるためには、まず、この年代に限った罹患や生存率などの基本的な情報や診療実態を示す必要があると考え、がん登録の世界に飛び込みました。Population-basedのがん登録データは、全年齢・全がんを対象とした登録であるため、小児・AYA世代のがんのような希少ながんにおいても、年齢別・がんの種別に分析することで、その現状を示すことができる、大変貴重なものだと感じております。全国がん登録が開始され、今後は法律の下で、より悉皆性の高いデータが作られていくと期待されますが、ここに至るまで、患者さんも含め、多くの方が関わられ、長い年月をかけて作り上げられてきたという背景を忘れてはいけなと思っています。全国から集められたがん登録データが、様々な方向で活用され、がん対策に役立てられることを願っております。私自身は、これからもがん登録データを活用し、わが国の小児・AYA世代のがん医療の現状を示していければと思っています。

最後に、本研究に関しまして、ご指導いただきました、大阪国際がんセンターがん対策センターの先生方、がん登録に関わるスタッフ、ロンドン留学でお世話になった先生方（K.Pritchard-Jones先生、B.Rachet先生）、米国・欧州の先生（A.Bleyer先生、A.Trauma先生）、大阪府がん診療連携協議会小児・AYA部会の先生方（井上雅美先生）、国立がん研究センターの先生方（松田智大先生、片野田耕太先生）に、この場を借りて、深謝申し上げます。



授賞式の様子